公現後第１主日礼拝説教「あなたは善いことのために造られた」予稿
日本基督教団石神井教会　2024年１月７日

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙　2章1～10節

1さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。2この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいました。3わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。4しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、5罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――あなたがたの救われたのは恵みによるのです――6キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。7こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。8事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。9行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。10なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　1章29～34節

29その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。30『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。31わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」32そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。33わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。34わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」

**「この方こそ神の子」【こども説教のために】**

新しい年の最初の日曜日を迎えました。年末には残っていたクリスマスの装飾も、1 月 6 日「公現日」にすべて取り外しています。御子のご降誕の祝いの中で迎えた新しい年の歩みが始まっています。

元旦に礼拝のないわたしたちの教会では、今日が今年最初の集まりです。新年一週間の間に、すでにいろいろなことがありました。元日夕方に襲ってきた能登・北陸の大地震では、大きな揺れや津波、また火災で多くの町が大きな被害を受けているようです。また、いまだにがれきの中に閉じ込められている多くの人たちの捜索が続けられています。多くの亡くなられた方や行方不明の方のあることが、報じられています。新年早々、家を失ったり、家族を亡くしたりした多くの人があることを、心に留めずにいられません。もちろん、被災した人たちの救援・救助のために正月休みを返上して働いてくれている人たちのことも忘れてはなりません。皆、本当は、新年を迎えて、家族とゆっくりとしたときを過ごし、この年の平安を祈りながら、希望や期待に胸を膨らませたかったはずです。

そのような中で迎えた日曜日、被災地の教会でも同じように礼拝のために集められてきた人たちが祈りをささげていることでしょう。わたしたちの教会が属する「日本基督教団」の教会のうち、今回の地震の震源にもっとも近かった輪島教会は、会堂建物が半分倒壊してしまったようです。この教会は、18 年前（2007 年）の能登半島地震でも大きな被害を受けて、会堂を補修し、牧師館を建て替えていました。今日は、会堂に集まることができなくても、牧師館の一室に集まって礼拝をする予定だと聞いています。その教会に限らず、教会はどこでも、どのような状況の中にあっても、可能な限り、日曜日の集まりを続けてきました。「神の御子」である主イエス・キリストに目を向けて、どんなときにも「神の子」として生きる歩みを、日曜日ごとに、また日々、新たにしようとしてきたのです。

主イエスに洗礼を授けた「洗礼者ヨハネ」が、「**この方こそ神の子である**」と証ししました。「**聖霊が降って**、この**人にとどまるのを見た**」と言いました。そして、「この方を**見よ**」と呼びかけたのです。

わたしたちも、日曜日ごとに集められて来る教会で、このお方を見続けます。「洗礼」から歩みを始められた主イエスに目を向けて歩みます。その行かれる先がたとえ「十字架」であったとしても、どんな苦難であったとしても、それは、「神の子」にふさわしい道なのです。

**「わたしはそれを見た」**

新年早々の大地震や羽田の航空機事故があったにもかかわらず、どこか他人事のような感覚にとらわれるところがあります。自分の生活に直接影響が及んでいないからでしょうか。もちろん、明日は我が身、なのです。それでも、わたしたちは、本当に自分たちが被害や影響を被るようになるまでは、いつも、どこか他人事としてしか出来事を受けとめることができないのかもしれません。

心理学の専門家は、「それは、自分の心を守るために必要なことだ」と助言します。自分と直接かかわりのないことに過剰に共感しすぎると、心が疲れてしまい、精神的なバランスを崩してしまうというのです。それは、そうなのかもしれません。けれども、そのような自分を守ろうとする反応が強すぎると、身近な人、目の前にいる人のことにも無関心になり、共感することがなくなってしまうこともあるのではないでしょうか。自分の中に引き籠り、硬い殻を身に着けて、他の人から影響を受けることを頑なに拒む、というようなことであれば、それが果たして健全な人としての心なのかと、疑問に思わざるを得ません。

わたしたちは、主イエスというお方を、どこか超人的な人格者として考えがちです。何者にも影響されない確固たる自己を保たれて、ただ神の御心と一体化した思いによって、すべてをなさり、すべてをお語りになられた方。真の人にして、真の神。わたしたちは、そういうお方として主イエスを考え、それを自分の目標とする理想とさえしているかもしれません。

わたしも、かつては、そう考えているところがありました。けれども、あるときから、そうではないように思い始めたのです。主イエスは、むしろ、人から受ける影響を強く自覚して、共観をもってそれを受けとめようとなさったお方だったのではないか、と。

主イエスは、洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられました。どの福音書も、そのとき、「天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、『あなたはわたしの愛する子。わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた」（ルカ 3:21~22）と伝えています。

洗礼者ヨハネは、「そのことを見て、証ししたのは、わたしだ」と、今日の福音書で言っているのです。ヨハネは、洗礼を授けた主イエスに、そう告げたのでしょう。そして、主イエスは、その言葉を真摯にお受けとめになられた。ご自分の上に聖霊が降ったこと、「あなたは神の子」と告げられたことを、真に受けとめられた。それが、主イエスの出発点であられたのです。

**神の賜物を…**

洗礼者ヨハネは、確かに、当時のユダヤ社会で名の知れた宗教家でした。大衆的な人気を誇るという点では、おそらく主イエスよりもはるかに上をいく存在だったと考えられます。だからと言って、主イエスがただ、高名な先生にありがたい言葉をいただいたので、俄然、強い使命感に突き動かされることになった、という単純な話ではないでしょう。

主イエスは、ヨハネから洗礼を授けられることを、選ばれました。そして、そのヨハネから告げられることを、神の出来事、神の言葉として受けとめられることを、良しとされたのです。洗礼が、聖霊の出来事、神の出来事であるように、なさったのです。

そうであればこそ、主イエスは、弟子たちに「洗礼を授けること」を命じられました。教会は、人々が自ら「洗礼を受けること」よりも、人々に「洗礼を授けること」を大切に考えてきました。主イエスの洗礼が、何よりも、洗礼者ヨハネによって「授けられたもの」であったからでしょう。

もちろん、主イエスは、ご自分の意志に反してヨハネから洗礼を授けられたわけではありません。自らヨハネの前に進み出て、ヨルダン川の水の中に身を沈められたのです。それでも、そこで為されたのは、「ヨハネから洗礼を授けられること」でした。そして、「天から聖霊が降ること」であり、「天から『これはわたしの愛する子』と告げられること」でした。それは、ヨハネを通して為され、告げられたことだったかもしれません。それでも、主イエスは、それを、神の為してくださる出来事、神のお語りくださる言葉、として受けとめ、弟子たちにお伝えになられたのです。

それが、わたしたちの受け継いできた「洗礼」から始まる生き方です。

使徒パウロは、そのように始まる生き方を、「**神の賜物**」によることと言います。「**恵みにより**」と表現します。パウロ自身は、主イエスを直接知らなかったとしても、主イエスの弟子たちを通して与えられたことを、そう受けとめたのでしょう。

それが、「**神に造られたもの**」としての生き方なのです。頑なな硬い殻に閉じこもっていたのでは受けとめられない「恵み」を受けとめて生きるのです。それは、人を通して与えられますが、神のお与えくださるものなのです。わたしたちの心を蝕む悪いものではなく、神の御心による善いものなのです。

わたしたちが「善いこと」の中に生きることができるようにと、神がお与えくださったものが、ここにもあります。あなたの隣に、身近に。開かれた心に、神のお与えくださる「善いこと」が、注がれています。